

横田の空兵、メモリアルデーを前に即応態勢を示し戦没者を追悼

Yokota Airmen showcase readiness, resolve to honor fallen service members before Memorial Day Weekend

May 28, 2025

By Staff Sgt. Manuel Zamora
374th Airlift Wing Public Affairs

メモリアルデーの週末を前に、横田基地で5月22日、第374空輸航空団の空兵が、「ウイング・ラン」と「オープン・ランクス・インスペクション（整容点検）」実施した。これらの行事は、戦没者への敬意を表すとともに、航空団全体の規律強化と即応態勢の維持、ならびに空軍の服装や身だしなみの基準遵守を目的とした取り組みとして実施された。

この行事には、メモリアルデーの追悼と、軍のコア・バリュー（基本理念）を再確認する2つの目的が込められており、それは第374空輸航空団教会牧師の言葉にも表されている。

牧師のマーク・ユクター中佐は、「彼らが払った犠牲に深い思いを馳せ、その記憶を称え続けるために、我々は決して揺るがぬ覚悟を持たねばならない。何をしよう、どこにしよう、彼らとの絆を忘れてはならないのです。その絆は今や、彼らの精神が我々の中に深く息づくことで、いっそう強固なものとなっている。……彼らの記憶を生涯にわたり称え続けること、それが彼らとそのご遺族に対して我々が果たすべき最低限の務めである」と述べた。

「ウイング・ラン」の後、空兵たちは制服に着替え、整容点検に臨んだ。これには、航空団の幹部に加え、航空戦術教導団、作戦システム運用隊、作戦情報隊など航空自衛隊航空総隊司令部の代表も立ち会った。

第374空輸航空団の最先任上級曹長ケネス・ハウク最上級曹長は、「空兵たちはプロフェッショナリズムとは何かを体現した」と述べ、「姿勢は凜とし、身だしなみも整い、横田の空兵は即応態勢を語るだけでなく、日々それを実践していることをゲストやチームメイトに示した」と続けた。

多くの空兵にとって、軍の伝統を深く受け留め、戦没者の犠牲に思いを馳せる機会となった。

第374整備群のロバート・キスナー軍曹は、「今日こうしてここに立っていること自体が、厳粛で身の引き締まる思いだった」と振り返り、「メモリアルデーは、先に亡くなった方への敬意を表す日であると同時に、自分自身もいつかその立場になり得るという現実を受け止める日でもある。もし自分がそうなった時には、その犠牲が尊厳と敬意をもって称えられることを願う」と語った。

「ウイング・ラン」と「オープン・ランクス・インスペクション」の実施は、第374空輸航空団が掲げる航空団全体の卓越性と多国間協力へのコミットメントを象徴するものであり、インド太平洋地域におけるロジスティックの拠点としての重要な役割をあらためて示すものとなった。

第374空輸航空団司令官リチャード・マックエルハニー大佐は、「我々は規律をもって先人たちを敬う。我々はただ記憶に留めるだけでなく、そのレガシーを継承し、覚悟と誇りを持ってともに立ち続ける」とコメントした。

